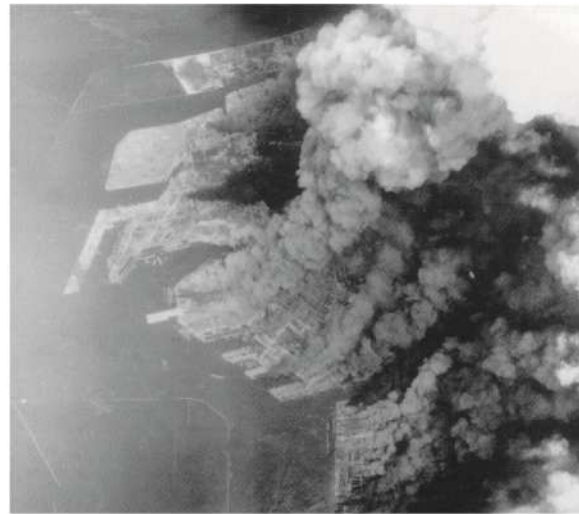


## 戦前の繁栄と戦争による壊滅的被害

苦しい戦争中の生活と大阪市内最大の空襲被害



1945（昭和20）年6月1日の大阪湾岸部上空からの空襲の様子

1937（昭和12）年の日中戦争を皮切りに、港区内も戦争の色合いが濃くなりました。大阪港からは多くの兵士が戦地へと出征していき、港区内にあった軍の関連施設から、鋼材、材木、セメント、防疫材料、日用品等が戦場に送られました。

1941（昭和16）年12月、日本軍による真珠湾攻撃により太平洋戦争が始まりました。戦争が長引くにつれ、物資の統制が厳しくなり、1940（昭和15）年にマッチと砂糖が切符制に、1941（昭和16）年には主食である米が配給制になるなど、最終的にはほとんどの日用品が配給や切符制となり、市民は苦しい生活を強いられました。

1945（昭和20）年になると、大阪上空には毎日のようにB29爆撃機が飛来し、爆弾や焼夷弾を落とすことが多くなりました。日本屈指の貿易港を擁する港区は空襲の対象となり、1月19日の爆弾投下以降、8月の終戦までに計6回も空襲にありました。3月13日深夜から14日未明の第1次と6月1日朝の第2次大阪大空襲により区域の88.6パーセントが焼け野原になり、大阪市では浪速区とともに最大の被害を受けました。

配給でもなかなか  
米が手に入らなかった

小川 宏 さん（80）  
西市岡（今の弁天）生まれ



1942（昭和17）年に国民学校（今の小学校）に入学しました。当時の給食は、硬いコッペパン1個とみそ汁1杯だけでした。物資も乏しくて、お金があっても何でも配給でしか手に入らなかったです。配給券とお金を持ってお店に行き、品物を買う、といった状況で、その配給も、例えば、1クラス50人で弁当箱が2つとか運動靴一足しか配給券の割りあてがなくとも少なかったです。誰が配給券をもらうかは抽選だったので納得するしかありませんでしたが、もらった人のことは羨ましかったですね。でも、配給券を巡って人をうらんだりけんかをしたりとかはなかったですね。

大空襲で一軒も残らず焼失

保 清子 さん（84）  
八幡屋大通（今の石田）生まれ

戦争がはじまってからは、どの家も表のガラスに紙をはって、家の下に防空壕を掘りました。紀伊水道から大阪に入ってきたB-29が、一晩に3回も4回も飛んできていました。そのたびに防空壕へ逃げていました。6月1日の大空襲で自宅もご近所も、一軒も残らず焼けました。残っていたのは夕風の岡ビルだけでした。当日は女学校へ登校していて、空襲が終わるまで学校にいました。家に戻るとき、焼夷弾で真っ黒な雨が降ったため、着ていた白い制服が真っ黒になってしまいました。その後、大阪市立運動場に逃げていた家族と再会しました。

### 国防婦人会

戦時中、モンペやたすき姿で銃後（※）活動する国防婦人会という全国的な組織がありました。この国防婦人会が発祥したのは港区です。満州事変（1931年）後、召集され戦地へ向かう人たちが見送りもなく天保山棧橋から船出する姿を見て、港区の主婦が中心となって大阪国防婦人会を発足し、やがて全国に広がりました。

※銃後＝戦場の後方。直接戦闘に携わっていないが、間接的に何かの形で戦争に参加している一般国民



## 戦前の繁栄と戦争による壊滅的被害

疎開で家族離ればなれに

1944（昭和19）年、アメリカ軍がサイパン島を占領した後、日本の都市への空襲が強化されました。そのため多くの都市の人たちは戦火を避けて地方に疎開しました（**人員疎開**）。人員疎開は、故郷や親せきを頼る縁故疎開から始まり、次に縁故疎開ができない子ども達には**集団疎開**が行われました。大阪市の集団疎開は、1944（昭和19）年8月から開始され、当時の国民学校初等科（現在の小学校）の3年生から6年生までが対象となり、港区内の全ての国民学校の子ども達は香川県に疎開をしました。

この時の6年生は、1945（昭和20）年2月末から3月にかけて卒業と進学のために大阪市に戻ったために3月の第1次大阪大空襲の被害にあい、沢山の子ども達が亡くなりました。また、疎開中に



三先小の疎開の荷物の運び出し



大阪市八幡屋国民学校3・4・6年生31名 香川県観音寺市の西光寺への疎開

大阪の空襲で家族を失った子ども達もいました。

集団疎開していた子ども達が、大阪にようやく戻れることになったのは、終戦後の1945（昭和20）年10月でした。

八幡屋小学校では、香川県観音寺市の寺での疎開時代の集合写真が発見されたことをきっかけに、2014（平成26）年度から6年生が修学旅行で現地に赴き、寺や地元の子供たちと交流しています。

親と離れてホームシック  
になる友達も

落合 潤 さん（82）  
寿町（今の弁天）生まれ



私は小学6年生の7月に縁故疎開でいったん奈良へ行ったのですが、その時は1か月で港区へ戻りました。その後香川県三豊市仁尾町という城下町へ、第2次の集団疎開で12月に弟と行きました。地元の学校の一角を借りて授業もありましたよ。当時まだ11～12歳だったので、中にはホームシックで夜になると泣いてしまう友達もいて、1人が泣き出すとみんな泣いてしまうこともありました。しかし、お世話になったお寺の門跡さんはじめ地元の方には本当によくしてもらったので、今でも仁尾町を訪ねている友達もいます。

疎開先でも食べ物には不自由

坂本 京子 さん（83）  
千代見町（今の弁天）生まれ

小学6年生の時に香川県琴平町に集団疎開しました。男子はお寺で、女子は3年生と一緒に旅館（鶴屋旅館）に疎開して、そこで1年を過ごしました。年下の子の世話が中心で、授業もあまりなかったですね。育ち盛りの時期でしたが何もない時代だったので、お腹が空いてしょうがなかったです。よくがんばったなと思います。両親は1回疎開先まで来てくれました。その時に芋餅をたくさんおみやげに持ってきてくれたんですが用事で部屋を空けている間に、先生が他の生徒に勝手に分けてしまったこともありました。